

Echoes of Time

景色が受け継ぐ能代

15～18ページは、能代市市制20周年記念事業の一環で実施する
秋田公立美術大学と能代市の連携による特集ページです。

vol. 04

February, 2026

「散漫さ」の可能性

2025年2月に市指定文化財となった鶴形金刀比羅宮は、1863年の完成以来、地域の人々の手によって大切に守り継がれてきた。急勾配の階段を登り切ると、多様な彫刻が施された社殿が忽然と姿を現し、強い印象を与える。なお、今回論じるのはp.16-17の写真であり、p.15の写真はその1年後に撮影されたものである。

(撮影場所：鶴形金刀比羅宮)





複数の時間軸を 呼び込む写真の正体

モノクロームで表現された雪中の参道写真。その美しさに惹かれる一方、どこか「散漫さ」が漂う―それが私の第一印象でした。写真から何かを読み取ろうとすればするほど視線は画面の中をさまよいつつ続けます。この「散漫さ」はどこからくるのか、参道と写真、それぞれの特性から考えてみたいと思います。

参道は、その奥に社殿や御神体が配置されるという明快な秩序を持ちながら、あえてそれらを見えにくくすることで、「そこに無いもの」がみえるように感じられる「空間である」と指摘されています（岡野、2012）。他方、写真は、「視覚における無意識的なもの」を写し出すことがよく知られています（ベンヤミン、1998）。両者は、肉眼では見え

ない領域に働きかける点こそ共通していますが、そのベクトルは異なります。参道は〈その先〉へ、写真は〈この場〉へと意識を導くのです。

このことを踏まえ、改めて写真を眺めてみましょう。写真の中央の急勾配な階段は、本来〈その先〉を強く示唆する存在です。実際、この場に立つ人は、階段の奥へと意識を向け続けるでしょう。しかし、写真では、階段の〈その先〉が可視化される未来は失われており、代わりに階段は純粹な物体として知覚され続けます。その結果、階段が「〈その先〉を見せるもの」ではなく、「〈この場〉に存在するもの」として前景化してきます。参道が与えるはずの未来の方向性が、〈この場〉に引き戻されているわけです。

階段と同じく、倒木や雪といった自然物も写真の中で強い存在感を放っています。これらは、参道の空間的秩序においてはノイズに過ぎませ

ん。しかし、〈この場〉への意識が支配的になると、空間を構成する主要な要素として立ち現れてきます。倒木は、倒れる前の姿や、この地がそもそも森であることを喚起し、意識を過去へと遡行させます。雪は、降り積もる前や雪解け後の風景、あるいは循環する季節といった複数の時間軸を呼び込みます。

このように、写真により参道の空間的秩序が解体されると、異なる時間が現前する〈この場〉の豊かさが浮かび上がります。これこそが、私の感じた「散漫さ」といえそうです。最後に、なぜ今回の写真はモノクロームで表現されたのでしょうか。そこには、美的判断だけではない、草薨さんの写真への期待を感じます。草薨さんは、鶴形金刀比羅宮の魅力的な歴史やランドスケープとどう対峙すればいいのか迷っていたのではないかと私は邪推します。そして〈この場〉を理解するために、

写真が捉える「無意識的なもの」に期待したのではないのでしょうか。モノクロームは、肉眼が捉える意識的な空間から、なるべく遠く離れようとする写真家としての抵抗であった、そう思えてくるのです。

「散漫さ」には、写真が〈この場〉にもたらす新たな知覚の可能性が秘められているのかもしれない。

【参考文献】

◎岡野真（山口えり訳）『日本の空間シテム―神社の参道空間―』美巧社、2012年

◎ヴァルター・ベンヤミン（久保哲司訳）『図説写真小史』筑摩書房、1998年

Echoes of Time

(エコーズ・オブ・タイム)

景色が受け継ぐ能代

vol.04 | February, 2026

写真 草薨 裕
執筆 井上宗則
デザイン 越後谷洋徳
編集 高橋ともみ
企画 秋田公立美術大学
制作 NPO法人アーツセンターあきた

能代市市制20周年記念事業業務委託